

厚生科学研究費補助金

エイズ対策研究事業

HIV 感染症の動向と予防介入に関する社会疫学的研究

平成 12 年度 総括・分担研究報告書

平成 13 (2001) 年 3 月

主任研究者 木原 正博

(京都大学大学院医学研究科)

目 次

1. 総括研究報告書	
HIV 感染症の動向と予防介入に関する社会疫学的研究	1
木原正博	
II. 分担研究報告書	
1. HIV/AIDS 流行の推計・将来予測・社会的インパクトに関する研究	8
橋本修二（東京大学大学院医学系研究科）	
2. 男性同性愛者の HIV 感染率、行動、予防介入に関する研究	16
市川誠一（神奈川県立衛生短期大学衛生技術科）	
3. 薬物濫用・依存者の HIV/STD 感染率・行動に関する研究	63
和田 清（国立精神・神経センター精神保健研究所）	
4. STD クリニック受診者の HIV/STD 感染率に関する研究	77
熊本悦明（札幌医科大学）	
5. 妊婦、献血者、保健所検査受検者等の HIV 感染率に関する研究	86
清水 勝（東京女子医科大学輸血科）	
6. 各種集団の HIV/STD 関連知識、行動に関する研究	94
木原雅子（長崎大学大学院医学研究科）	
（資料）アンケート用紙	
7. 性産業従事者の知識、行動、予防介入に関する研究	150
池上千寿子（ぶれいす東京）	
（資料）アンケート用紙	
III. 研究成果の刊行に関する一覧表	186
IV. 研究成果の刊行物・別冊	189

総括研究報告

厚生科学研究費補助金(エイズ対策研究事業)
総括研究報告書

HIV 感染症の動向と予防介入に関する社会疫学的研究

主任研究者：木原正博（京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻国際保健学講座）

研究要旨：わが国の、HIV 感染症流行の現状・将来動向、個別施策層に対する有効な予防介入についてのエビデンスを示し、有効かつ効率的な行政施策の発展に資することを目的として研究を行った。様々な個別施策層を対象とした研究から、若者は知識が希薄なままリスクの高い性行動を行っていること、MSM では無防備な性行為が依然高率で、特に若いMSM で顕著であること、薬物依存者では回し打ちが高頻度な上にあぶりが急増し、かつ異性との無防備な性行為を行っていること、セックスワーカーは、リスクの高い性行為に曝されていることなどが示され、わが国の個別施策層がいずれも HIV 感染に対して脆弱性の高い状態にあることが示された。システムモデルによる流行予測では、2010 年時点でわが国の感染者数は数万人に達する可能性もあることが示唆されたが、同時に、シミュレーションでは、コンドーム普及率が 5% 上昇すれば、10% 以上の流行抑止が可能であることを示した。予防介入研究では、MASH 大阪の予防介入パッケージの効果評価を行い、予防介入前後で行動にほとんど変化がなかったことから、MASH 大阪以下の予防対策では効果が疑わしいことを反証的に示し、今後のわが国の対策全般を考える上で重要なエビデンスを提示した。また、わが国では、流行が欧米よりもはるかに低率であるにもかかわらず、献血血液の HIV 抗体陽性率が高いが、献血者に関する調査によって、それが特に初回献血者に多いことを明らかにし、原因解明に一步前進したことも本年度の特記すべき成績と考えられる。

分担研究者

橋本修二（東京大学大学院医学系研究科）、市川誠一（神奈川県立衛生短期大学衛生技術科）、和田清（国立精神・神経センター精神保健研究所）、熊本説明（札幌医科大学、性と健康医学財団）、清水勝（東京女子医科大学輸血科）、木原雅子（長崎大学大学院医学研究科）、池上千寿子（特定非営利活動法人ふれいす東京）

A. 研究目的

わが国の、①HIV 感染症流行の現状・将来動向、②HIV/STD 関連知識・リスク行動の実態や個別施策層に対する有効な予防介入についてのエビデンスを示し、効果的かつ効率的な行政的施策の発展に資する。

B. 研究方法の概要

(1) HIV 感染症の動向に関する研究

①将来予測（継続）：システムモデルと 1999 年末までのエイズ動向調査データに基づいて、中長期予測及び対策シナリオの効果に関するシミュレーションを実施。

②医療費調査（継続）：HIV 感染症の医療費の推移、年間医療費及び将来の医療経済的インパクトを分析することを目的にレセプト及びカルテを調査。

③拠点病院患者調査（新規）：エイズ動向調査を補完するデータを得るために、拠点病院にアンケート調査を行い、エイズ動向調査への届出率を調査。HIV 感染症患者の受療動向（静態・動態）を把握する調査研究を白阪班と共同で企画し、調査計画を策定した。

④保健所受検者調査（新規）：上昇を続ける保健所受検者 HIV 陽性率の背景を解明するために、属性、検査動機やリスク行動に関するアンケート調査を企画。現在予備調査を一部保健所で実施中。

⑤献血発見感染者調査（継続）：上昇を続ける献血血液の HIV 抗体陽性率の背景を解明するために、全拠点病院を受診している献血発見 HIV 感染者の検査動機や感染経路を調査。

⑥妊婦 HIV/STI 陽性率調査：日本産婦人科学会の協力で、妊婦のほぼ全例にクラミジアを検査をしている大学病院産婦人科の協力を得て、妊婦の HIV/STI 検査結果を収集分析（継続）。日本母性保護協会の協力で 800 医療機関からの HIV/STI データ収集（進行中、新規）。

⑦STD 患者の HIV/STI 感染率及び行動に関する調査 (継続) : 関東地方の男性 STD 患者及びセックスワーカーの血液を WHO ガイドラインに基づき、HIV/STI 関連マーカーを anonymous unlinked に検査し、経年変化を観察、及び HIV 感染と STI 感染の関連を分析。

⑧薬物乱用・依存者の HIV/STI 感染率及び行動に関する調査 (継続) : 日本の薬物依存治療入院患者の 20% をカバーする 6 医療機関の新規患者と自助グループのメンバーに、HIV/STI の血液検査と行動調査 (注射行動と性行動) を実施。

⑨MSM の感染動向調査 (継続) : 関東地区定点検査機関における検査データとアンケートデータを分析し、MSM の HIV 感染率のモニタリングを実施。

(2) HIV/STD 関連知識・行動・予防介入に関する研究

研究デザイン: 質的研究、準実験的研究デザイン、行動理論、参加型研究 (当事者の参加) などを積極的に導入する。

① HIV 感染者の行動や QOL 向上に関する研究 (新規) : HIV 感染者自身の参加の下、ヒアリングと 2 回の予備調査で、属性、特性、健康状態、社会関係、性行動、抑うつ・不安等に関するアンケートを作成。予備調査を実施。

② MSM の HIV/STD 関連知識・行動・予防介入に関する研究 (継続) : 大阪、東京における MASH (men and sexual health) プロジェクト。MASH 大阪は、1998 年に結成され、研究者、医療関係者、コミュニティ、NGO、行政が協働してコミュニティトライアルを実施。ベースライン調査 (1999 年 7 月) 実施後、個人/小集団/社会各レベルの介入プログラムを含む予防パッケージを開発・実行し、1 年後の 2000 年 7 月に第一次フォローアップ調査を実施してその効果を評価した (one group pretest-posttest design)。予防介入パッケージには、HIV/STD 検査・カウンセリング (3 日間、SWITCH2000)、STD 勉強会 (14 回)、バーオーナー講習会 (1 回)、クラブイベント (7 回)、ポスター・パンフ作製配布 (15 回)、コンドーム配布 (19 回)、ビデオクリップ作成、ホームページ作成 (6461 ヒット)、研修コース等が含まれ、準備を含め 1 年間延べ 6000 時間以上を投入。MASH 東京は、2000 年 6 月に結成、11 月にベースライン調査を実施した。若い MSM をターゲットにした予防介入プログラムを準備中。

③ セックスワーカーの予防介入研究 (継続) : セックスワーカー [SW] 自身が中心となり、研究者と共に SWASH (sex worker and sexual health) を結

成。女性・男性 SW の分類やファッション系 SW に関東地方でアンケート調査を実施。

④ 若者の HIV/STD 関連知識・行動・予防介入に関する研究 (継続) : 首都圏と某地方県の 10 代の若者を対象に、質的調査 (フォーカスグループインタビュー、以下 FGI) と量的調査 (アンケート調査) を実施し、知識や性行動の実態、ニーズ、情報チャンネルを探索した。首都圏では、性的に活発な 2 グループの女性に FGI を実施し、内容分析を実施。それに基づいて質問票を作成した。さらに、街頭でカップルの若者を Time/space サンプリングし、質問票調査を実施。某地方県では、4 グループの高校生男女を対象に FGI を実施 (データ分析中)、また、養護教員の 1 グループに対しても FGI を実施した (データ分析中)。現在、同県下約 100 高校に対し、教育庁の推薦を得て、調査を依頼中 (現時点で 15 校承諾)。

⑤ 来日外国人の HIV/STD 関連知識・行動・予防介入に関する研究 (継続) : タイプロジェクトは、新たなサンプリング定点としたタイ仏教寺院で、性行動を含むアンケート調査を予備調査。ブラジルプロジェクトは、本年度は、ブラジル保健省と大規模な対日系ブラジル人共同プロジェクトを合意・調印。

(倫理面への配慮)

カルテ情報が主治医以外には本人が特定されないように配慮されていること、また、HIV 抗体検査は本人の希望あるいは承諾に基づいて行われていること、また一部本人の承諾を経ない検査 (STD 患者に一部) については、WHO のガイドラインに沿って、厳格に anonymous unlinked の原則に遵守して行われていること、アンケートはすべて本人の希望に応じて実施していることを確認。

C. 研究結果

(1) HIV 感染症の動向に関する研究 ; ① 将来予測 : システムモデルを用いた中長期流行予測を行い、HIV 感染者の 2010 年時点有病数を、男性異性間感染者 9000 人、女性異性間感染者 4000 人、同性間感染者 35000 人と予測した。同モデルを用いたシミュレーションにより、コンドーム使用を 50% から 5% 増加すると、2010 年の HIV 感染の時点有病数が、異性間で 12-13%、同性間で 18% 減少することを示し、コンドーム促進対策が予防として最も有効であることを示した。② 医療費調査 : 109 人延べ 596 月のレセプト及びカルテを調査し、多剤併用後の医療費は大半が薬剤費で月 17-20 万と高

額化し、しかも単剤期と異なり病期にかかわらず医療費ほぼ一定であることを示した。③拠点病院患者調査：拠点病院にアンケート調査を行い、222施設（57%）より患者681人分の情報を回収した。エイズ動向調査への初回報告、病変報告の届出率は83-94%であり、いずれの報告の報告率も感染症法前後で変化の無いことを示した。④献血者調査：4血液センターを対象に、献血者中のHIV抗体陽性率を献血頻度別に調べ、初回者の陽性率が再来者より10倍以上も高頻度であることを示した。献血でHIV感染が判明し、拠点病院で受療中の感染者96例を調査し、検査目的が15%で、性別では男性に検査目的が多いことが示された。感染経路は半数以上が同性間性行為であった。⑤妊婦調査：妊婦のHIV抗体陽性率を、拠点病院と全数検査県で調べ、前者が後者の7-8倍も高値で（10万対約18 vs. 2.3）、前者が一般妊婦の感染率を反映しないことを示した。⑥STD患者調査：関東男性STD患者の血清を匿名非特定の方法で検査し、HIV感染率が、0.8%（5/628）と昨年度（0.3%、2/813）より増加したことを認めた。また1995-2000年の男性患者（n=14）中、梅毒合併例が9例と高率であることを認めた。近畿の某医療機関でも同じ傾向（11/13例）が確認された。⑦薬物乱用・依存者調査：全国の主要薬物依存者治療施設7施設の男性新規症例369人中、HIV感染は0%だが、HCV感染は42%に及ぶことを示した。回し打ちの頻度は依然高く（>40%）、加えて昨年度に引き続き、あぶり行為（覚せい剤を火であぶって蒸気を吸引する行為）が高率であることを認めた。女性との性行動も風俗、非風俗を問わず活発で、しかもコンドーム使用が低率であるなど、行動的に非常に高リスクの状態にあることを示した。⑧MSM（男性とセックスをする男性）調査：都内某検査施設における受検者の感染経路とHIV抗体検査結果から、MSMの感染率は、約3%で1996年以来ほぼ一定であることを示した。また、受検者の半数以上がリピーターであることから、検査時カウンセリングの重要性が示唆された。

(2) HIV/STD 関連知識・行動・予防介入に関する研究；①HIV感染者の研究：一拠点病院のHIV感染者を対象に参加型のアンケート調査を実施し、61人（72.6%）から回答を得た。社会関係の困難がQOLを左右すること、情緒的サポートが増えると、プライバシー漏洩、差別経験、ネガティブサポート増加などの負の側面も増加することが示された。性交は一般に抑制的であった。②MSMの研究：コミュニティ規模の予防介入研究であるMASH（men

and sexual health）プロジェクトを大阪、東京で展開した。MASH大阪（1998年設立）では、予防介入後初めての効果評価を実施し（617人、回収率99%）、全体に知識や予防意識に好ましい変化が生じていることを確認したが、MASH大阪を知らない群でも同程度の変化を示していたため、MASHの特異的効果であるとは結論できなかった。一方、性行動やコンドーム使用率には介入前後の変化は認められなかった。これらのことから、知識の上昇だけでは行動変容に至らないこと、MASH大阪の予防パッケージの内容・規模では、行動変容を導くには十分でなかったことが示された。一方、検査・カウンセリングイベント（SWITCH 2000）には、250人が参加し、その影響はコミュニティレベルでも認められた。受検者中のHIV感染率は2.4%、梅毒12%であった。MASH東京（2000年設立）では、初めてのベースライン調査を実施し、10代のMSMがとりわけ知識が低く、性行動が無防備であることを示した。③セックスワーカーの研究（予備調査）：店（ファッション系）の拒否とSWからの低応答のため、回収率は低率（38%、n=95）にとどまった。しかし、雇用者によってセイファーセックスの実行を阻害されているケースが多いこと、誤ったSTD予防法が流布していること、仲間からの情報入手を好む傾向があることから、ピア教育の可能性が示唆された。フェラチオでSTDが感染するという知識は全員が認知していた。④若者の研究：首都圏の街頭の若者の性行動等を、初めて質的調査法と量的調査法を統合した方法によって調査した。質的調査（フォーカスグループインタビュー）により、日常生活の様子（例：帰宅時間遅い、クラブやカラオケで遊ぶ）、性行動（例：高1,2が最も活発、その場限りの相手との性交が多い、飲酒時に無防備になる）、コンドーム使用状況（例：使う必要性や意思を表明するが、実際には使用していない）、STD/HIVに関する認識・予防意識の状況（例：知識が不確実、特定の相手は安全という意識、STD情報を欲しがっている、専門家からの情報を求めている、STDより妊娠を心配している、HIVへの関心が薄い）が明らかになった。量的調査では、女性が10代である301カップルを調査し、よく遊ぶ場所（例：カラオケ60-75%、ファーストフード店55-67%、コンビニ52%）、性行動（例：約2/3がこれまでに2人以上の相手を経験、10人以上経験者は男16%、女9%、ラブホテル利用者は70%以上、半数が避妊法として膣外射精を行っている、約3割が同時に不特定の相手とも交際している）、コンドーム使用情况（例：相手の数が

多い人ほどコンドーム使用率が低い、使用目的は、避妊が90-95%で、HIV/STD 予防は15-18%に過ぎない)が明らかになった。⑤来日外国人の研究：在日タイ仏教寺院において、タイ人のアンケート(予備調査)を実施した。サンプルは女性に偏り(80%)、HIV/STD 関連知識が低率であること、検査陽性であると通告や強制送還されるという不安を抱いていることが示唆された。

D. 考察

本年度は、様々な個別施策層を対象とした研究が行われ、若者は知識が希薄なまま、リスクの高い性行動を行っていること、MSM では無防備な性行為が依然高率であること、特に若いMSM で顕著であること、薬物依存者では回し打ちが高頻度な上にあぶりが急増し、かつ異性との無防備な性行為を行っていること、セックスワーカーは、リスクの高い性行為に曝されていることなどが示されたが、これらはわが国の個別施策層がいずれもHIV 感染に対して脆弱性の高い状態にあり、HIV 流行の準備状態にあることを意味するものである。また、実際に、システムモデルによる我々の流行予測では、2010年時点でわが国の感染者数は5万人近くに達する可能性もあり、今の状態で推移すれば、わが国は確実に流行に巻き込まれることになろう。しかし、予防が不可能なのではない。上記モデルを用いたシミュレーションでは、コンドーム普及率が5%上昇すれば、10%以上の流行抑止が可能であることが示された。しかし、行動変容を導くのは容易な事業ではないことが、MASH 大阪の予防介入の効果評価の結果によって明瞭に示された。綿密な計画と相当の人的時間的コストからなる予防パッケージが行動変容にほとんど効果を示さなかったからである。これは、MASH 大阪以下の予防対策では効果が極めて疑わしいことを反証的に示すものであり、今後の対策を考える上で重要なエビデンスと考えられる。また、わが国では、流行が欧米よりもはるかに低率であるにもかかわらず、献血血液のHIV 抗体陽性率が奇妙に高いが、献血者に関する調査によって、それが特に初回献血者に多いことが示され、原因解明に一步前進したことも本年度の特記すべき成績のひとつと考えられる。

今後の研究の方向としては、MSM 研究では、本年度のエビデンスに基づいて、現在の予防パッケージを改良し、予防行動をより起こしやすい環境作りと個人のスキルアップにつながる内容へと進化させ、再び効果評価を行う。若者についても、

本年度の質的・量的研究によるニーズアセスメント分析に基づいて、地域保健所や教育関係者と協働して、学校を舞台とした予防介入研究のデザインに着手し、エビデンスの蓄積を急ぐ。来日タイ人、ブラジル人については、本国と連携した予防介入研究に着手する。また、動向(感染率、行動)のモニタリング体制をより安定なものにすると共に、その変化の意味を明らかにするような補完的調査の整備を進めていく。

E. 結論

わが国のHIV 感染流行は、加速局面にあり、かつ個別施策層はいずれも流行に脆弱な状態にある。流行の将来的インパクトを最小にとどめるために、包括的な予防対策の開発と実施を速やかに行う必要がある。

F. 研究発表

著書

1. 木原正博, 木原雅子, 内野英幸, 石塚智一, 尾崎米厚, 島崎継雄, 杉森伸吉, 土田昭司, 中畝菜穂子, 簗輪眞澄, 山本太郎. 日本人のHIV/STD関連知識, 性行動, 性意識についての全国調査. 教育アンケート調査年鑑下2000, 創育社, 東京, 2000
2. 木原正博. 若者の性体験. 子ども白書2000年版(子供を守る会編). P125-127, 草土文化社, 東京, 2000
3. 木原雅子, 木原正博. 大学生の性行動—全国国立大学生セクシャルヘルススタディから. 三煌社, 東京, 2001(印刷中)
4. 木原雅子. STDと性行動. 性感染症/HIV感染(熊本悦明他編). メジカルビュー社, 東京, 2001年(印刷中)

論文(総説)

1. 木原雅子, 市川誠一, 山本太郎, 木原正博. 日本人の性行動の現状と予防対策の戦略—性的ネットワークと行動理論, 治療学 特集「HIV感染症」 35, 2001(印刷中)
2. 木原正博, 木原雅子. 日本人の性行動の現状と動向, 日本医事新報 特集「性感染症学」 2001(印刷中)
3. 木原正博. HIV感染症の疫学: 日本の動向と将来予測(特集「エイズとHIV感染症の現状と今後の展望」), カレントセラピー 19:12-15, 2001
4. 木原雅子, 木原正博. ピル解禁とHIV/STDの今

- 後. 泌尿器外科 13:375-379, 2000
5. 木原正博. エイズは今-「第二のエイズの時代」の予兆. Ortho 2:13-17, 2000
 6. 木原正博. HIV/STD予防教育の見直しを. 生活教育 44:2-3, 2000
 7. 木原正博. 全国性行動調査 (HIV&Sex in Japan 1999). 保健体育教室 248号:22-25, 2000
 8. 木原正博, 木原雅子. これからのHIV/STD予防対策-最近のHIV感染動向を踏まえて, 生活教育 45:7-12, 2000
 9. 市川誠一: エイズ予防指針とHIV/STD流行防止への取り組み, 保健婦雑誌, 56 (8), 666-672, 2000
 10. 木原雅子. 日本の若者の性行動とSexual Health. 性と健康. P26-p29, 2000年11月
 11. 熊本悦明. 女性優位のSTD時代-STDの最近の動向. 臨床婦人科産科 55:10-18, 2000年
 12. 熊本悦明. ウイルス性感染症のわが国における疫学的現状. 化学療法の領域 16:2038-2046, 2000
 13. 熊本悦明. わが国における性感染症流行の現状. Medical Corner 107:22-25, 2000年
- 論文 (原著)
1. Masako Ono Kihara, Jane Kramer, Deborah Bain, Masahiro Kihara, Jeff Mandel. Knowledge of and attitudes towards contraceptive pill use in Japan-Results of a national survey. Family Planning Perspectives 2001 (in press)
 2. Masako Ono-Kihara, Masahiro Kihara. First nationwide sexual behavior survey in Japan-results of HIV&Sex in Japan 1999". J. Asian Sexology 2, 2001 (in press)
 3. Shuji Hashimoto, Takao Matsumoto, Masaki Nagai, Yutaka Matsuyama, Yosikazu Nakamura, Tamami Umeda, Mitsuhiro Kamakura, Seiichi Ichikawa, Satoshi Kimura, Kazuo Fukutomi, and Masahiro Kihara: Delays and Continuation of Hospital Visits Among HIV-Infected Persons and AIDS Cases in Japan, Journal of Epidemiology; 10: 65-70, 2000
 4. M. Kihara, . Ichikawa, S. Hashimoto, M. Ono-Kihara, M. Imai, K. Wada, Y. Kumamoto, M. Shimizu: The Current Situation of HIV/AIDS Epidemic in Japan, X III INTERNATIONAL AIDS CONFERENCE Basic Science Clinical Science Epidemiology Prevention and Public Health, 597-603, 2000
 5. M. Ono-Kihara, M. Kihara, Uchino H, Sugimori S, Yamamoto T, Minowa M, Ishizuka T, Nakaune N, Ozaki Y, Shimazaki, Tuchida S. Knowledge of and attitude toward contraceptive pill use in Japan- results of "HIV&Sex in Japan Survey 1999", X III INTERNATIONAL AIDS CONFERENCE Social Science: Rights, Politics, Commitment and Action, 169-174, 2000
 6. 梅田珠実, 木原正博, 橋本修二, 市川誠一, 鎌倉光宏, 嶋本 喬. 日本の異性間性的接触によるエイズの特徴-エイズサーベイランスによる英国及び米国との比較研究. 日本公衛誌 2001 (印刷中)
 7. 木原正博, 岩木エリーザ, 木原雅子, 市川誠一, 大屋日登美: 滞日ブラジル人に対する効果的予防啓発法開発のための準備実験的介入研究 (The Latin Project) -Part I: 研究デザインとベースライン調査の結果-, 日本エイズ学会誌, 2: 1-12, 2000
 8. 市川誠一, 木村哲, 大屋日登美, 木村博和, 岡慎一, 伊藤章, 増田剛太, 花房秀次, 相楽裕子, 橋本修二, 鎌倉光宏, 中村好一, 木原正博: HIV/AIDS医療費に関する研究 -AZT, ddIの占める費用割合-, 日本エイズ学会誌, 2: 22-29, 2000
 9. 風間孝, 河口和也, 菅原智雄, 市川誠一, 木原正博: 男性同性愛者のHIV/エイズについての知識・性行動と社会・文化的要因に関する研究 (第一報) -性的空間利用, エイズへの関心, HIV感染者との交流の観点から-, 日本エイズ学会誌, 2:13-21, 2000
 10. 松山 裕, 橋本修二, 市川誠一, 中村好一, 城所敏英, 福富和夫, 木原正博: エイズサーベイランス報告に基づく死亡報告数の推移とその検討, 日本エイズ学会誌, 第2巻, 第1号, 30-34, 2000. 02
 11. 橋本修二, 福富和夫, 市川誠一, 松山 裕, 中村好一, 木原正博: HIV感染者数とAIDS患者数の将来予測, 日本エイズ学会誌, 2: 35-42, 2000
 12. 中村好一, 松山裕, 城所敏英, 梅田珠美, 岡慎一, 木村博和, 鎌倉光弘, 市川誠一, 橋本修二, 福富和夫, 木村哲, 木原正博: デルファイ法による調査結果からみたHIV感染/AIDS疫学像,

日本エイズ学会誌, 2:127-133, 2000

13. 熊本悦明他. 日本における性感染症 (STD) 流行の実態調査—1999年度のSTDセンチネルサーベイランス報告. 日本性感染症学会誌 11:72-103, 2000

学会発表 (シンポジウム)

1. 市川誠一. 偏見からパートナーシップへ—個人で,そして企業内で,第11回日本臨床微生物学会総会 (公開シンポジウム:見直そうエイズ—21世紀へのメッセージ),横浜,2000
2. 木原雅子. 若者の性行動とHIV/STDリスク—ピル解禁を迎えて. 第11回日本臨床微生物学会総会 (公開シンポジウム:見直そうエイズ—21世紀へのメッセージ),横浜,2000
3. 木原正博. わが国のHIV流行の現状と展望. 第11回日本臨床微生物学会総会 (公開シンポジウム:見直そうエイズ—21世紀へのメッセージ),横浜,2000
4. Kihara M. The first nationwide sexual behavioral survey in Japan. The 6th Asian Congress of Sexiology (Symposium: Sexual Behavior in the Era of AIDS), Kobe, Japan, 2000
5. 木原正博. わが国におけるHIV感染症/STD流行の現状と展望. 第14回日本エイズ学会学術集会・総会 (シンポジウム「21世紀の日本とエイズ」),京都,2000
6. 木原雅子. 日本人の性行動とHIV/STD感染リスク:全国性行動調査の結果より. 第14回日本エイズ学会学術集会・総会 (シンポジウム「21世紀の日本とエイズ」),京都,2000
7. 木原正博. 更年期男性の性行動—全国性行動調査から. 第15回日本更年期医学会学術集会 (シンポジウムIII 男性更年期),札幌,2000
8. 木原雅子. 若い女性の性行動と性感染のリスク. 日本性感染症学会第13回学術大会 (市民公開講座「若年女性と性感染症」),名古屋,2000
9. 熊本悦明. 女性性器クラミジア感染症の大流行をめぐって. 第52回日本産婦人科薬器ア、ランチョンセミナー、2000年
10. 生学会総会,前橋,2000.10.20
2. 日高康晴,市川誠一,木原正博:ゲイ・バイセクシュアル男性のコンドーム使用行動の心理的要因に関する研究,第14回日本エイズ学会総会,京都,2000.11.28
3. 鬼塚直樹,日高康晴,市川誠一,大屋日登美,木原雅子,木原正博:サンフランシスコ及びロサンジェルス在住日本人MSMの性行動に関する研究,第14回日本エイズ学会総会,京都,2000.11.28
4. 市川誠一,鬼塚哲郎,大屋日登美,木村博和,鬼塚直樹,日高康晴,高山佳洋,木原雅子,木原正博:大阪地域のMSMにおけるHIV・STD感染の予防啓発介入研究. 1. ベースライン調査によるニーズアセスメント,第14回日本エイズ学会総会,京都,2000.11.28
5. 風間孝,大石敏寛,柏崎正雄,河口和也,嶋田憲司,菅原智雄,市川誠一,木原正博:男性同性愛者のHIVに対する知識・情報媒体・性行動の3年間の比較,第14回日本エイズ学会総会,京都,2000.11.28
6. 木村博和,木村 哲,岡 慎一,増田剛太,相良裕子,白阪琢磨,岩本愛吉,坂本光男,藤純一郎,村上未知子,橋本修二,市川誠一:HAART導入後のHIV感染症の医療費,第14回日本エイズ学会総会,京都,2000.11.28
7. 鬼塚哲郎,市川誠一,大屋日登美,木村博和,鬼塚直樹,日高康晴:検査と予防介入—MASH大阪による臨時予防相談・検査,第14回日本エイズ学会総会,京都,2000.11.30
8. 内野英幸,木原雅子,木原正博,市川誠一,大屋日登美,落合賀津子,木村博和,山本太郎:全国国立大学生 Sexual Health Study—Part1—性行動・HIV/STD 関連知識の実態について,第14回日本エイズ学会総会,京都,2000.11.28
9. 内野英幸,木原雅子,木原正博. HIV&SEX in JAPAN Survey—Part1:日本人のコンドーム使用状況とその背景,第14回日本エイズ学会総会,京都,2000.11.28
10. 木原雅子,木原正博,市川誠一,大屋日登美,落合賀津子,木村博和,山本太郎,内野英幸,片峰茂:全国国立大学生 Sexual Health Study—Part2—STD /HIV予防意識・STD罹患状況の実態について,第14回日本エイズ学会総会,京都,2000.11.28
11. 山本太郎,木原雅子,木原正博,内野英幸,箕輪眞澄,尾崎米厚. 日本人のHIV/STD関連知

学会発表 (一般演題)

1. 風間孝,河口和也,菅原智雄,市川誠一:男性同性愛者におけるHIVに対する知識・情報媒体・性行動の3年間の比較,第59回日本公衆衛

- 識、性行動、性意識に関する全国調査—
part3：日本人の経口避妊薬（ピル）に関する知識・意識について。第14回日本エイズ学会学術集会・総会、京都、2000
12. 内野英幸, 木原雅子, 木原正博, 市川誠一, 大屋日登美, 落合加津子, 木村博和, 山本太郎. 全国国立大学生Sexual Health Study—Part1—, 性行動・HIV/STD関連知識の実態について。第14回日本エイズ学会学術集会・総会、京都、2000
 13. 木原雅子, 木原正博, 市川誠一, 大屋日登美, 落合加津子, 木村博和, 山本太郎, 内野英幸, 片峰茂. 全国国立大学生Sexual Health Study—Part2—, STD/HIV予防知識・STD罹患状況の実態について。第14回日本エイズ学会学術集会・総会、京都、2000
 14. 小堀栄子, ニクン・ジッタイ, 木原雅子, 木原正博. 在日タイ住民のエイズに関する知識・意識・性行動の調査 (Thai Project) , —エイズ知識に関する年齢別・性別分析。第14回日本エイズ学会学術集会・総会、京都、2000
 15. 水島希, 池上千寿子, 要友紀子, 木原雅子, 木原正博, 沢田司, 不動明, 松沢呉一, 桃河モモコ, 森あい. 性風俗産業で働く女性のHIV/STD予防行動。第14回日本エイズ学会学術集会・総会、京都、2000
 16. Ono-Kihara. M., Uchino. , Ishizuka. T, Minowa . M, Nakaune. N, Ozaki. Y, Shimazaki. T, Sugimori. S, Tsuchida. S, Yamamoto. T, Kihara. M. HIV & sex in Japan Survey part2 : Knowledge of and attitudes toward contraceptive pill use in Japan. 13th International AIDZ Conference, Durban, 2000
 17. Totoni. R, Kihara. M, Kita. T, Honda. M, Yochino. N, Nakasone. T, Tsukahara. Y, Takayama. N, Shibata. N. National cooperative study on vertical transmission of HIV-1 in Japan. 13th International AIDZ Conference, Durban, 2000
 18. Uchino. H, Ono-Kihara. M, Ishizuka. T, Minowa . M, Shimazaki. T, Sugimori. S, Tsuchida. S, Yamamoto. T, Kihara. M. HIV&SEX in JAPAN Survey—Part1 : Current Condom Use During Vaginal Intercourse and its Implications for HIV Prevention in Japan. 13th International AIDZ Conference, Durban, 2000
 19. Kihara. M, Ono-Kihara. M, Uchino. H, Ishizuka . T, Minowa. M, Nakaune. N, Ozaki. Y, imazaki. T , Sugimori. S, Tsuchida. S, Yamamoto. T. HIV&SEX in JAPAN Survey—Part3 : Paid sex in Japan. 13th International AIDZ Conference, Durban, 2000
 20. Kihara. M. Current situation of HIV/AIDS in Japan. 13th International AIDS Conference, Durban, 2000
- G. 知的所有権の取得情況
特になし。

分担研究報告

平成 12 年度厚生科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）
分担研究報告書

HIV 感染症の動向と予防介入に関する社会疫学的研究

分担研究者 橋本修二（東京大学大学院医学系研究科）

グループ長：橋本修二（東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻）

班 員：福富和夫（国立公衆衛生院特別研究員）

中村好一（自治医科大学公衆衛生学）

木村博和（横浜市立大学医学部公衆衛生学）

市川誠一（神奈川県立衛生短期大学公衆衛生学）

城所敏英（中野区鷺宮保健相談所）

木村 哲（東京大学大学院医学系研究科感染制御学）

岡 慎一（国立国際医療センターエイズ治療・研究開発センター臨床研究開発部）

白阪琢磨（国立大阪病院総合内科）

松山 裕（京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻医療統計学）

研究協力者：升森 隆（東京都衛生局医療福祉部エイズ対策室）

梅田珠実（神戸市保健福祉局）

長谷川嘉春（相模原市保健所保健予防課）

田村嘉孝（大阪府健康福祉部地域保健福祉室感染症難病対策課）

渡辺晃紀（栃木県保健福祉部健康増進課）

谷原真一（島根医科大学医学部環境保健医学第一講座）

増田剛太（東京都立駒込病院感染症科）

相楽裕子（横浜市立市民病院感染症科）

岩本愛吉（東京大学医科学研究所付属病院）

坂本光男（横浜市立市民病院感染症科）

藤 純一郎（国立大阪病院総合内科）

村上未知子（東京大学医科学研究所付属病院）

山口拓洋（東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻）

研究要旨 HIV/AIDSに関する様々な情報を収集・解析、発生動向を明らかにするために、「エイズ発生動向調査の解析」、「保健所情報の解析」、「医療費情報の解析」、「将来予測」、「拠点病院情報の解析」の5プロジェクトを実施することとした。研究の初年度として、各プロジェクトごとに3年間の研究計画を立案した。研究計画はいずれも実施可能性を確認しており、次年度以降の成果が期待できる。それ以外に、エイズ発生動向調査の解析では一部の解析、保健所情報の解析では保健所で収集可能性のある情報の整理と保健所の事例検討を行った。医療費情報の解析では前回医療費調査の解析、将来予測では中長期展望、拠点病院情報の解析では届出に関する調査の解析を行った。これらの詳細については、別の報告を参照されたい。

A. 研究目的

HIV感染症の発生動向解析研究グループにおける研究目的は、HIV/AIDSに関する様々な情報

を収集・解析、発生動向を明らかにすることにある。エイズ発生動向調査の解析、保健所情報の解析、医療費情報の解析、将来予測、拠点病

院情報の解析の5つのプロジェクトを実施する。

本年度は研究の初年度であり、各プロジェクトごとに3年間の研究計画を立案、研究の準備を行うとともに、一部の検討を行った。

B. 研究方法

グループ会議とプロジェクト会議などにより、研究計画の立案などを実施した。第1回グループ会議（6月）で、研究方針と研究体制を議論、各プロジェクト会議（8～9月）で研究計画案を作成した。第2回グループ会議（10月）で、研究計画案を議論・確定した。プロジェクトごとに、研究計画を具体化、実施可能性を確認し、第3回グループ会議（1月）で検討した。

C. 研究結果

1. エイズ発生動向調査の解析プロジェクト

研究計画の概要としては、担当は橋本（リーダー）、市川、梅田、城所、升森、松山の6人（統計・疫学・行政の専門家を含む）とした。目的はエイズ発生動向調査を中心として、解析方法を検討、解析結果を提示し、有効活用を図ることとした。初年度は解析計画の策定と一部の解析、2年度は解析の実施、3年度は解析の継続・総括とした。

解析計画の概要を表1に示す。主な課題として、①感染症法施行前後の報告状況変化の吟味、②新たな報告項目（推定感染時期など）を含む解析、③他情報（行政資料、文献を含む）との比較検討、④国際比較による日本の特徴把握（男女差、年齢差など）、⑤他グループ（MSMグループなど）との共同研究であった。

一部の解析として、HIV感染者報告数の感染経路比較および感染症法前後のHIV/AIDS報告状況を検討した。図1に、感染経路別、HIV感染者報告数の1995～1999年の年次推移を示す。なお、感染経路不明は年次・性ごとに各感染経路に比例配分して加えた。日本国籍では、HIV感染者報告数は、いずれの感染経路も増加傾向であった。同性間性的接触、異性間性的接触の男、異性間

性的接触の女の順に増加率が大きかった。外国国籍では、いずれの感染経路ともにほぼ一定であり、異性間性的接触の女、異性間性的接触の男、同性間性的接触の順に少なかった。

図2に、日本国籍におけるHIV感染者の感染場所と年齢分布を示す。1995～1999年における海外感染割合（感染場所不明を除く割合）は、異性間性的接触の男、異性間性的接触の女、同性間性的接触の順に大きかった。年齢分布をみると、異性間性的接触の男では、40歳以上が約50%であり、一方、異性間性的接触の女と同性間性的接触では39歳以下が約70%であった。

図3に、日本国籍における感染症法前後のHIV/AIDSの報告状況を示す。HIV感染者報告数をみると、1999年1～6月では、感染症法（1999年4月）の施行後3か月は、施行前3か月よりもHIV感染者報告数が多かった。なお、これは、過去の診断例が感染症法施行直前に多く報告されたためである。2000年1～6月では1999年1～6月、7～12月よりも少なかった。AIDS患者報告数をみると、初回報告分がほとんどであり、病変報告分は少なかった。

以上の一部の解析結果から、HIV/AIDS報告の動向について、エイズ発生動向調査に基づく詳細な解析の必要性など、今後の課題が明確となった。

2. 保健所情報の解析プロジェクト

研究計画（新規）の概要としては、担当は中村（リーダー）、長谷川、田村、渡辺、谷原、城所、升森の7人（疫学・行政の専門家が中心）とした。目的は保健所で収集可能な情報を検討し、情報を収集・解析することとした。初年度は保健所で収集可能性のある情報の整理、保健所の事例検討と研究計画の策定、2年度は情報の収集、3年度は情報の収集・解析とした。

保健所におけるHIV抗体検査受診者調査の研究計画の概要を表2に示す。目的はHIV抗体検査受診者の受診行動（頻回受診を含む）と危険な行動の把握とした。協力保健所で2001年4月

～2002年3月（必要に応じ継続検討）に、HIV抗体検査を受診した者に、同意の下で、調査票を配布、個別に郵送回収する。調査内容は国籍・性・年齢、受診経験、受診理由と危険な行動とした。

保健所で収集可能性のある情報の整理、保健所の事例検討、および、保健所におけるHIV抗体検査受診者調査の計画の詳細については、別の報告（「保健所におけるHIV/AIDS疫学研究の可能性に関する検討」）を参照されたい。

3. 医療費情報の解析プロジェクト

研究計画の概要としては、担当は木村博和（リーダー）、市川、木村哲、岡、白阪、増田、相楽、岩本、坂本、藤、村上の11人（疫学・臨床の専門家が中心）とした。目的は、医療費情報の収集を継続し、医療費の動向を把握するとともに、年間医療費の推計などを行うこととした。初年度は前回調査の解析と医療費調査計画の立案、2年度は医療費調査の実施、3年度は医療費調査の実施・解析とした。

医療費調査の研究計画の概要を表3に示す。目的はHIV/AIDS医療費の動向把握と年間医療費の推計とした。対象は5医療施設で、同意の得られたHIV/AIDS受療者 約100人（血友病を除く）とした。2001年7月～2002年3月に、レセプトとカルテ調査により、診療行為別医療費、CD4値、初診時期などを得る。それ以外に、対象医療施設全体の受療状況と死亡前の医療費を調査する。本調査の特徴は前2回の医療費調査と比較可能とするために、調査方法などを同一とし、また、様々な病状での医療費を得ることにある。

前回医療費調査の結果および医療費調査計画の詳細については、別の報告（「HAART普及後のHIV感染症の医療費に関する研究」、「HIV感染症の医療費の動向と社会経済的影響に関する研究—平成12年度医療費情報の解析プロジェクトの研究計画—」）を参照されたい。

4. 将来予測

研究計画の概要としては、担当は橋本（リーダー）、福富、松山、山口の4人（統計の専門家が中心）とした。目的はHIV/AIDSの近未来予測、中長期展望とその基礎的検討を行うこととした。初年度は昨年度の構築モデルにより、中長期展望を実施した。2年度は予測のための基礎的検討を行い、3年度はそれに基づいて近未来予測を実施することとした。

中長期展望の概要を表4に示す。対象は日本国籍の異性間と同性間の性的接触とした。期間は2000～2010年末であり、指標はHIV時点有病数（AIDS未発病のHIV感染者数）などとした。モデルは昨年度に構築されたシステムモデルを基礎とし、初期状態とパラメータをエイズ発生動向調査などにより設定した。現在の性行為の頻度などが今後不変というシナリオ（基本ケース）について、2010年末のHIV時点有病数などを試算した。対策効果として、5つのシナリオを画き、その各々と全体による基本ケースに対する低下率などを評価した。初期状態・パラメータの変化により、基本ケースの試算値はきわめて不安定であったが、対策効果による低下率は比較的安定であり、今後の対策の立案・推進に参考になるものとする。中長期展望の詳細は、別の報告（「HIV感染者数とAIDS患者数の中長期展望—対策効果の影響評価を中心として—」）を参照されたい。

5. 拠点病院情報の解析

研究計画の概要としては、担当は橋本（リーダー）、中村、木村博和、市川、山口の4人（統計・疫学の専門家が中心）とした。目的は「HIV感染症の医療体制に関する研究班」との共同研究として、HIV/AIDSの受療状況の静態・動態を把握することとした。初年度は、昨年度に実施した届出に関する調査の解析（担当：中村、谷原）、研究計画の立案を行った。2年度は静態調査の実施・解析、3年度は動態調査の実施・解析とした。

HIV/AIDSの受療状況に関する静態・動態調査の研究計画の概要を表5に示す。目的は静態調査が1時点の受療者数、動態調査が1年間の新規・中止者数の把握である。対象をブロック拠点病院と拠点病院とし、調査票を郵送法で配布・回収する。調査内容は国籍、血液製剤による感染とそれ以外ごとのHIV/AIDS受療者数である。特徴は調査内容を限定し、回収の完全性を目指すことにある。

静態調査計画の詳細、届出に関する調査結果については、別の報告（それぞれ「HIV/AIDSの受療動向に関する静態調査の研究計画—HIV感染症の医療体制に関する研究班との共同研究—」、「感染症予防新法に伴うHIV感染者及びAIDS患者の届出に関する医師の意識調査」）を参照されたい。

D. 考察

プロジェクトの研究計画は、実施可能性も確認しており、次年度以降の成果が期待できる。エイズ発生動向調査の解析では一部の解析結果を示したが、今後、エイズ発生動向調査データの使用許可の下で、感染症法施行前後の報告状況の変化を含めて詳細な解析の実施を期待したい。保健所情報の解析では、保健所の抗体検査受診者調査により、頻回な受診状況や危険な行動などの詳細な把握が期待される。医療費情報の解析では、多剤併用療法の導入前後の医療費動向が示され、今後、医療費調査により動向把握と年間医療費の推計が期待される。将来予測では対策効果による中長期的なHIV/AIDSへの影響が評価され（HIV時点有病数自体はきわめて不安定）、今後、近未来予測が期待される。拠点病院情報の解析では医師の届出状況が把握され、今後、共同研究による受療者の静態・動態の把握が期待される。

E. 結論

HIV/AIDSに関する様々な情報を収集・解析、発生動向を明らかにするために、エイズ発生動

向調査の解析、保健所情報の解析、医療費情報の解析、将来予測、拠点病院情報の解析の5つのプロジェクトを実施することとした。研究の初年度として、各プロジェクトごとに3年間の研究計画を立案、研究の準備を行うとともに、一部の検討を行った。研究計画はいずれも実施可能性を確認しており、次年度以降の成果が期待できる。

F. 研究発表

1. 論文発表

- 1) Hashimoto S, Matsumoto T, Nagai M, Matsuyama Y, Nakamura Y, Umeda T, Kamakura M, Ichikawa S, Kimura S, Fukutomi K, Kihara M. Delays and continuation of hospital visits among HIV-infected persons and AIDS cases in Japan. *J Epidemiol*, 2000;10:65-70.
- 2) 市川誠一, 木村 哲, 大屋日登美, 木村博和, 岡 慎一, 伊藤 章, 増田剛太, 花房秀次, 相楽 裕子, 橋本修二, 鎌倉光宏, 中村好一, 木原正博. HIV/AIDS医療費に関する研究—AZT, ddIの占める費用割合—. *日本エイズ学会誌*, 2000;2:22-29.
- 3) 松山 裕, 橋本修二, 市川誠一, 中村好一, 城所敏英, 福富和夫, 木原正博. エイズサーベイランス報告に基づく死亡報告数の推移とその検討. *日本エイズ学会誌*, 2000;2:30-34.
- 4) 橋本修二, 福富和夫, 市川誠一, 松山 裕, 中村好一, 木原正博. HIV感染者数とAIDS患者数の将来予測. *日本エイズ学会誌*, 2000;2:35-42.
- 5) 中村好一, 松山 裕, 城所敏英, 梅田珠実, 岡 慎一, 木村博和, 鎌倉光宏, 市川誠一, 橋本修二, 福富和夫, 木村 哲, 木原正博. デルファイ法による調査結果からみたHIV感染/AIDS疫学像. *日本エイズ学会誌*, 2000;2:127-133.

表1 エイズ発生動向調査の解析計画の概要

1. 感染症法の施行前後での報告状況の変化の吟味
2. 新たな報告項目を含む解析（推定感染時期など）
3. 他の情報との比較検討（行政資料、文献を含む）
4. 国際比較による日本の特徴把握（男女差、年齢差など）
5. 他のグループとの共同研究（MSMグループ）

表2 保健所における HIV 抗体検査受診者調査の研究計画の概要

- 目的： 保健所における HIV 抗体検査受診者の受診行動（頻回受診を含む）
と危険な行動を把握
- 組織： 本プロジェクトチームおよび協力保健所
- 期間： 2001年4月～2002年3月（必要に応じて、継続を検討）
- 方法： 協力保健所での HIV 抗体検査受診者に、
同意の下で、調査票を個別に配布・郵送回収
- 内容： 国籍・性・年齢、検査受診経験、受診理由、危険な行動
- その他： 協力保健所から受診者数・配布数を報告

表3 医療費調査の研究計画の概要

- 目的： HIV/AIDS 医療費について、動向の把握および年間医療費の推計
- 対象： 医療施設（5施設）で、同意の得られた
HIV/AIDS 受療者100人（血友病以外）
- 期間： 2001年7月～2002年3月
- 方法： レセプトおよびカルテ調査
- 内容： 診療内容別医療費、CD4値、初診時期など
- その他： 医療施設全体の受療状況を調査
死亡前の医療費を調査
- 特徴： 前2回の医療費調査と比較可能とする。
年間医療費の推計のために、すべての病状の医療費を得る。

表4 中長期展望の概要

対象：	日本国籍の異性間性的接触の男と女、同性間性的接触の男
期間：	2000～2010年
指標：	HIV 時点有病数、HIV 年間罹患数、AIDS 累積数
前提：	HIV 根治薬・有効なワクチンは未開発または未普及
モデル：	システム・モデル
初期状態：	1999年末の状態は1985～1999年のエイズ発生動向調査に基づいて設定。
パラメータ：	基本ケースは文献を参考に設定し、1995～1999年の HIV/AIDS の 動向がエイズ発生動向調査に一致するように調整。 対策効果ケースはシナリオにより設定。
算定方法：	初期状態から、状態間推移確率により各年の状態を試算。 基本ケースの指標値、対策効果ケースの指標値との差を算定。
感度分析：	初期状態・パラメータを変化させて、結果への影響を評価。

表5 HIV/AIDS の受療状況に関する静態・動態調査の研究計画の概要

体制：	医療体制研究班と本研究班の共同研究
目的：	HIV/AIDS の受療動向について、 静態調査を実施、動態調査を1年後に実施
対象：	ブロック拠点病院・拠点病院
方法：	調査票を郵送法により配布・回収
内容：	国籍、血液製剤とそれ以外ごとに、 静態調査では1時点の受療者数 動態調査では1年間の新規・中止数
特徴：	調査内容を限定し、回収の完全性を目指す

図1 HIV感染者報告数の感染経路間比較 一年次推移

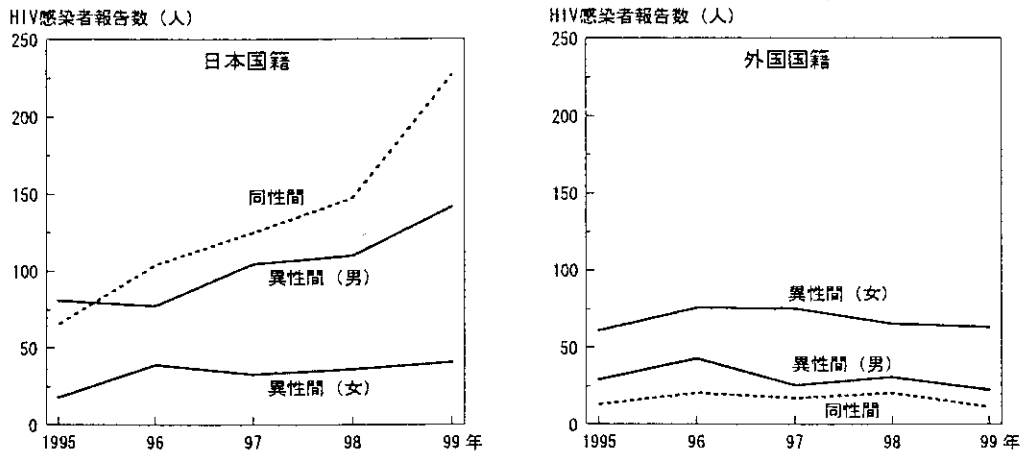


図2 HIV感染者報告数の感染経路間比較 感染場所と年齢

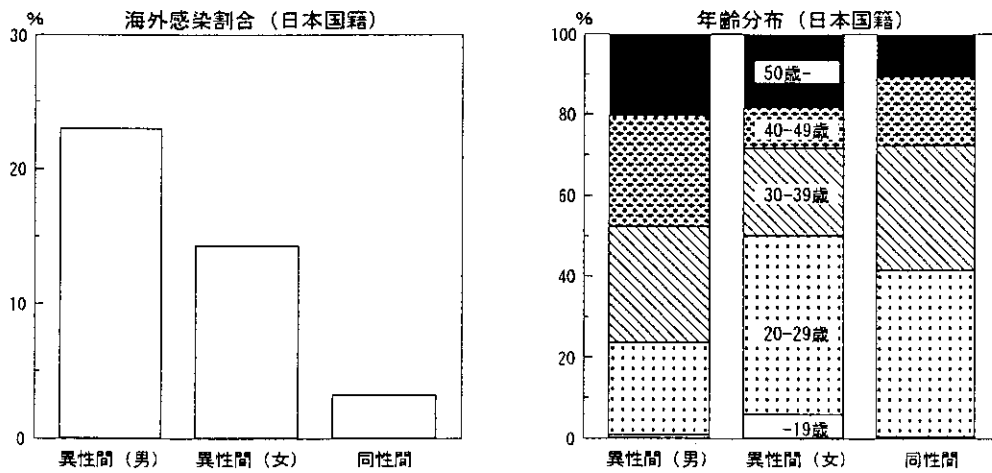
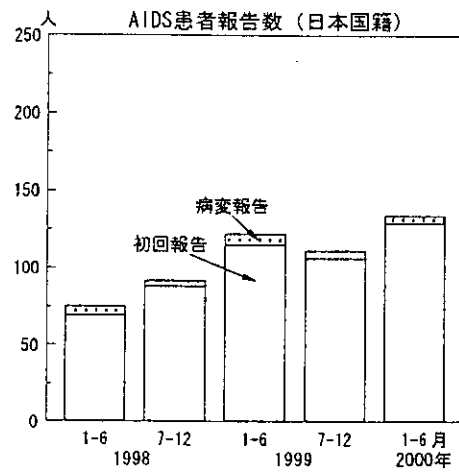
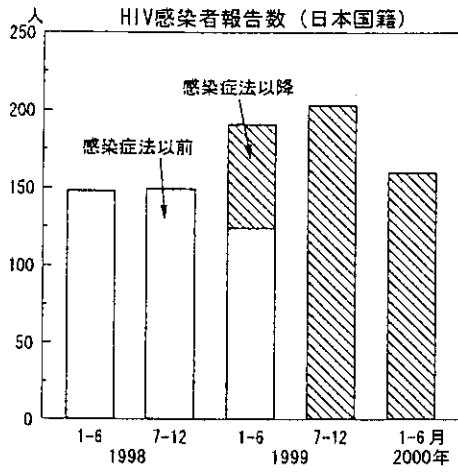


図3 感染症法前後のHIV/AIDSの報告状況



平成12年度厚生科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）
分担研究報告書

HIV感染症の動向と予防介入に関する社会疫学的研究

分担研究者： 市川誠一（神奈川県立衛生短期大学）
班 員： 今井光信（神奈川県衛生研究所ウイルス部） 佐藤未光（東京大学医科学研究所/MASH 東京）
大屋日登美（神奈川県立衛生短期大学） 井戸田一朗（東京女子医科大学/MASH 東京）
鬼塚哲郎（京都産業大学/MASH 大阪） 一居 誠（大阪府健康福祉部感染症・難病対策課）
鬼塚直樹（カルフォルニア大学サンフランシスコ校） 日高庸晴（京都大学大学院）
木原雅子（長崎大学大学院医学研究科） 升森 隆（東京都衛生局医療福祉部）
木原正博（京都大学大学院社会医学系専攻） 守尾輝彦（新宿区新宿保健所）
木村博和（横浜市立大学医学部公衆衛生学教室） 山口 剛（東京都南新宿検査相談室）
(五十音順)
海外共同研究 Kyung-Hee Choi (UCSF, CAPS)
研究協力者： (各研究課題に記載)

要 約

本研究では、男性同性間感染の報告例が多い東京および大阪地域を重点的な予防推進対象地域とし、MSMにおけるHIV/STD感染予防に効果的な介入プログラムの開発、実施、効果評価を行なうこととした。平成12年度は、大阪においては前年までのMASH大阪の実績を基に予防介入プログラムを展開しかつその効果評価を進め、東京ではMASH大阪をモデルとして疫学研究者、ゲイ・ボランティアによる協働プロジェクトを結成し、ベースライン調査等の情報を基に東京地域に適した具体的な予防啓発プログラムや介入デザインについての検討を行なった。本年度実施した以下の研究課題について成果を要約する。

I. MSMにおけるHIV/STD感染の動向に関する研究

M検査機関での検査数は1994年後3年間は6000件前後であったが、1998年7814件と大幅に増加し、1999年8318件、2000年8459件となった。2000年の男性受検者数は5873人、内HIV抗体陽性者は46人(0.78%)でほぼ同率で推移した。男性のHIV抗体陽性者の89.1%が、男性同性間での感染推定経路であった。

II. 大阪地域におけるHIV/STD感染予防啓発の推進に関する研究(MASH大阪)

a. 大阪地域におけるHIV/STD感染の予防介入、 b. MASH大阪による予防介入の効果評価

1999年のベースライン調査に基づき、コミュニティ・レベル、グループ・レベル、個人レベルの三つのレベルにおいて介入プログラムを展開した。特に、「セクシャル・ヘルスに切り替えよう」を標語に予防啓発SWITCH2000 (SWITCH-A (Art:ゲイアート展)、B (Blood:臨時HIV/STD相談・検査)、C (Community:STD勉強会、バー、ハッテン場オーナー・従業員講習会)、D (Dance:ダンス・ベネフィットパーティ))を5月連休の3日間に行なった。HIV/STD感染リスクの低減に向けた啓発介入(第1次予防)、およびHIV/STD感染の早期発見と適切な早期治療のための医療機関への連携(第2次予防)を目標に行なった検査前予防相談・検査(HIV、HBV、梅毒)には251人の参加があった。受検者249人の内、検査結果は236人(94.8%)に報告でき、また、HIV/STD検査の結果から医療機関を紹介した者の内の92.6%(25人)はその医療機関を受診していた。

MASH大阪の予防啓発プログラムの効果を評価するために、2000年7月に北区堂山町のクラブ(ベースライン調査と同じ)の協力を得てフォローアップ調査を実施した。1999年ベースライン調査と2000年フォローアップ調査についてMASH大阪との関わり度別に分析したところ、「エイズ治療の延命効果」「STD感染とHIV感染リスクの関係」は、2000年調査ではMASH大阪予防プログラムに参加した者(参加群)、MASH大阪の情報に接触した者(情報群)共に高率になっていた。「性病に罹っていると必ず症状がでる」の正答率は参加群に正答率が高かった。

フェラチオでのコンドーム使用では、「全く使用しない」の回答率が、参加群、情報群が未接触群に比べて低率で、「使用/不使用」の回答率が高くなっていた。「必ず使用する」の回答率には変化がなかった。